

スパルタンVim 7.0

Road to VimConf 2018

MURAOKA Taro (KoRoN, @kaoriya)

2018/08/10 発行

まえがき

2018/11/24にVimConf 2018が開催されます。2013年に始まったVimConfも今年で6回め、ついにVimの作者である Bram Moolenaar 氏を招くに至りました。この VimConf の開催に深く関わってきた筆者だからこそ書けるRoad to VimConf (VimConfへの道)をお届けします。本書は過去に公開したVim昔語やブログから関係したエントリーを抜粋再編集し、そしてVimConf 2018 開催にいたる事情・思いを新たに書き下ろした一冊です。

Vim昔語/遭遇編

当時、私は大学生で自宅、研究室、バイト先の3箇所で開発をしていた。Visual Studio の前身であるVisual C、ViVi、jvimなんかを使ってプログラムを書いていたと記憶している。jvimのサイトにはgVimのバージョン5のバイナリがあったので試してみたが、ろくに設定もされていなかったから「ああjvimで良いな」と思ったものだった。

ところがふとしたことから本家のVimのマニュアルを読み、添付されているサンプルの設定vimrc_exampleとgvimrc_exampleを試してみたとき私に衝撃が走った。それまで書いていたC、Perl、TeXのコードがカラフルに色づけされていた。圧倒的に読みやすい。今では珍しくないシンタックスハイライトも当時はキーワードハイライトが出始めた頃でまだ珍しかった。しかもVimは多くの見たこともないのが大半だったファイル形式について既にシンタックスハイライトが提供されていた。

このシンタックスハイライトによりVimと他のエディタとの間には雲泥の差があった。ただ問題が無かったわけでもない。TeXファイルに日本語が混ざるとハイライトが崩れていたのだ。原因はVimの正規表現エンジンが日本語つまりマルチバイト文字に対応していなかったこと。卒論をTeXで書いていた私には致命的とも言える問題だったため、期限の迫りつつある卒論をそっこのけで正規表現エンジンの改良にのめり込んでいった。regex.cを印刷・製本し、往復3時間の通学時間の大半を読解と修正方法の検討に費やした。そうして正規表現エンジンのマルチバイト文字対応化は完成した。またそれ以外にも多くの修正を完成させ、普段の使い方では困らないようになっていた。

私はこの成果を誇らしく思い、共有・公開しようと考えVimの作者であるBram Moolenaar氏にメールで連絡をとった。思えば明確な意図をもって英語でメールを書いたのはこのときが最初だった。ほどなくBramからの快諾を受けコンパイル済みバイナリを配布するようになった。当時の香り

屋はまだ独自ドメインkaoriya.net取得前で研究室のサーバを使っただけの配布だった。配布にあたってのコンセプトは「ダウンロードしてすぐに無設定で便利に使える」。当時の私の技術・知識・思慮不足はあったものの、今もそこは揺らいでいない。

この時に一緒に考えていたことがある。日本独自のモノになってはいけない。成果は可能な限りオフィシャルに還元し、世界全体に貢献するべきである。と、厨二病のそれである。逆に言えば、変更を行う場合はそれが自分や日本人だけではなく世界的に見てどういう意味を持ち、どうすればその有用性を理解してもらえるかを考えながら具体的な形に落としこむ必要がある。この作業には最終的にどういう文面で開発用メーリングリストであるvim-devに送ればすんなりと受け入れられるか考える工程も含まれる。これは英語力に今も不安があり議論になればまず勝てない私にとっては特に重要だった。ならば議論の余地が無いほど、ぐうの音もでないほど説得力のある変更内容とパッチを作れば良いのだ。この時の訓練は仕事をできるようになった今でも、相手が日本人であっても役に立っている。

そうやってvim-devで活動を重ねて拙いながらも英語でコミュニケーションすることに苦を感じなくなった頃、日本人からと思われる投稿を見つけた。そうmattnさんである。私はまたしても衝撃を受けた。彼の「とりあえずパッチできたから必要かどうかわからないけど送るわ」という姿勢にである。当時から彼のパッチのクオリティは非常に高く、しかし先進的な機能ほど本家に取り込ませる上ではお世辞にも良い戦略とはいえず、また英語に堪能というわけでもなかった。今にして思えば大阪系の積極性がなせる技だったのかもしれないが、当時の私はやや反感を覚えたほどである。でもオフィシャルに送るという結論と行動そして変更内容のセンスの良さには非常にシンパシーをも覚え、どちらからともなく連絡を取り、気が付けば毎日のようにチャットをする仲になっていた。

ちなみにmattnさんとは今日までオフラインでの面識がない。Bramとすら会ったことがあるにもかかわらず。

解説: Vim昔語/遭遇編

初出:2011/08/11 <https://www.kaoriya.net/blog/2011/08/20110811/>

Vimとの、そしてmattnさんとの遭遇エピソードです。文中にあるとおり執筆当時はBramとは会ったことがあったんですが、mattnさんとはまだ面会を果たしていませんでした。Bramと会った話、およびmattnさんと会った話は本書に収録しています。

Vim昔語/未来編

昔語で未来編とはどういうわけだ、というツッコミは甘んじて受ける。人は歩みを止めないし止めるべきではない。常に何事にも一步を踏み出す勇氣が必要、これはそんな明日への姿勢を新たにしたい思い出話。

2008年秋の早朝、私は赤坂プリンスのロビーにいた。緊張していた。話はその数ヶ月前にさかのぼる。Bramから個人的にメールが来た。

「秋に東京に行くんだけど会えないか?」

「いいね、ぜひ会おう」

Bramが毎年一ヶ月ほどを世界のあちこちへ旅行していることは知っていた。この年は日本だった。私は彼が自分を気にとめていてくれて声をかけてくれたことがとても嬉しくて、軽い気持ちで会う約束をした。そしてBramの宿泊先ホテルの上階のレストランで朝食をとりながら歓談しようということになったのだ。

ロビーの電話でBramを呼び出し、彼を待ってる間も胸中は複雑だった。メールでしかやり取りしたことのない一生会うことのない相手かもしれない相手と直接会える喜びと、メールや翻訳程度は苦ではないが会話などともにしたことのない英語力への不安とでゴチャゴチャだった。しかも助

けは誰一人いない。会うと安請け合いした数ヶ月前の自分を呪ったりもした。なお高校時代の英語の試験は一回を除いて全て赤点で追試だったと付け加えておく。

エレベーターから降りてきた Bram はとにかくデカかった。私の身長は170cm に若干届かずと大きくはないが、その私が見上げる Bram は 2m 近いんじゃないか。歳を重ねているため、よく目にする若い頃の写真のイメージとはかなり違うが、漂う知的な雰囲気には変わらないものがあった。

挨拶と握手を交わす。手の大きさは今も覚えている。お土産にと用意した浅草の小桜のかりんとうを、異文化への理解が深い彼は喜んで受け取ってくれた。彼からは在住しているスイスのチョコレートをいただいた。一般的には日本のものと風味が大きく異なる海外のチョコレートが大好きな私は、必要以上に喜びを表現していた気がする。

告白しよう。その後、何を話したかはほとんど記憶にない。ちゃんと対応できていたかも怪しい。さらに惜しいことにもう今では食べられない赤坂プリンスの朝食ビュッフェの味すら記憶にない。

しかし楽しい笑いの絶えないひとときだった。前日訪れた谷中の風景をとても気に入ったこと。ビルに囲まれた景色は世界中どこでも一緒だということ。「赤坂」と「浅草」の発声、区別が難しいこと。今日は鎌倉をみて、そのあとは関西に向かうこと。シーズンなので台風が心配だが、それを含めての日本だということ。ほうっておけば PC ばかり触っていること。この旅行では電子機器を一切封印していること。最新のVimスクリプトはPythonからの影響が強いこと。Vimの将来のメンテナンスの話。そしてVimという素晴らしい仕事への感謝と、それを通じて出会えた喜びを。

楽しい時間を過ごした後、朝食を提供するレストランの最後の客になろうかという頃、私たちは別れた。私はその足で出勤し、Bramはたぶん鎌倉へ向かったのだろう。日本を楽しんでくれただろうか、台風は大丈夫だっただろうか、かりんとうは口にあってだろうか。もっと英語ができれば、もっといろいろ喋れたのかもしれない。

でもそれは重要なことではなかった。終わってみれば当初の不安は何だったのかと思う。大事だったのは相手に対し真摯に尊敬し興味を抱くこと。そして知り合うための一歩を踏み出す、小さな勇気。

独自改変バイナリを配布するために、ほとんど初めての自分の意志で書いた英語のメール、その送信ボタンを押すときのあのためらい。あれを超えるのに必要だったのは本当に小さな勇気と決断だったけれど、それらの積み重ねが今に繋がり、その今がさらに明日へと繋がってゆく。今後、何か行動するのをためらうようならば、この経験が一歩を踏み出す次の勇気になってくれるだろう。踏み出せばきっと違う景色が見えてくるから。

解説:Vim昔語/未来編

初出:2011/08/13 https://www.kaoriya.net/blog/2011/08/20110813_2/

これはもはや10年も前にBramと会った際の記憶を基に書いた記事です。尊敬する人と会うことは、そこにどんな気後れがあろうとも楽しいことであり、未来への希望・生きる糧となることを強く実感しました。

お好み焼きを食べに大阪まで来ました

本場のお好み焼きを食べたいなあ。と思い立ったので大阪に来てしまいました。折もよくh_eastさんが場をセッティングしてくれたということと、私の「夕飯にお好み焼きを食べるためだけに大阪に行ったよ」って言えばカッコイイんじゃないか、というお子さまじみた考えがマッチしてしまいました。

場所は新大阪駅から御堂筋線で約30分、長居にある...あれお店の名前を知らないやw 駅から出て5秒という好立地。事前にお店の外観の写真を見せ

でもらっていたので、名前を覚えてなくても辿り着けました。お隣が「宮本むなし」でした。なお帰りに確認したらお好み焼き屋さんの名前は丸葉でした。本場のお好み焼きはなんて言うか軽い感じで食べやすく、ワイワイ言いながらヘラで取り分けていると...なんというか連帯感が高まるのです。

以上おしまい。ではダメですよ。やっぱり。

勘の良い方ならもうおわかりかもしれませんが、このお好み焼きには日本におけるVimの歴史において非常に大きな意味がありました。それは参加者を見ればわかります。

- h_eastさん (幹事)
- heavenshellさん
- ytanikeさん
- mattnさん
- そして私

特に下2人。

以前にも書きましたが、私とまつつんさんはVimをきっかけに10年以上オンラインでやり取りしてきた、私の片思いでなければ気心の知れた間でありながら、一度も会ったことのない二人だったのです。たぶん15年にもなるでしょう。ちなみに本来なら書くまでもありませんし自負というわけでもありませんが、私とまつつんさんがいなければ日本におけるVimのポジションは今とはまったく異なるものになっていたかもしれません。おそらくは今ほど普及することもなかったんじゃないでしょうか。

そんな二人が初めて対面したのです。まさにそこは日本のVimサミット・オン・ジ・お好み焼きの鉄板。大阪は怖いところだと常々吹きこまれていたので、鉄板の上で焼き土下座も辞さない覚悟でやってまいりました。が、その覚悟はどこへやら。私は開始時間の直前までホテルで艦これにうつつを抜かしていたため、数分遅れて到着した時には全員がそろっていま

した。あれ?これ本気で焼き土下座の流れ?

実際には焼き土下座ということもなく、参加者の面々にBram氏へ渡したのと同じ小桜のかりんとうを手土産にご挨拶。あれ、なんで僕、まっつんさんと向い合ってお見合いしてんの...っていうかなんでまっつんさん、服着てるの。

飲み会の内容は技術者同士ですから、大体わかっていただけるでしょう。特に当たり障りのないココには書けない話ばかりです。とても美味しく楽しい時間を過ごさせていただきました。

アホ・ミーツ・アホ。ネット上での遭遇から実際に会うまで10幾年、誰も踏みしめてない新雪があれば立ち入って足あとを残さずにはいられないアホと、面白そうであればコスト度外視で踏み込んでしまうアホはこうして面識を得ることと相成りました。

解説:お好み焼きを食べに大阪まで来ました

初出:2013/09/14 <https://www.kaoriya.net/blog/2013/09/14/>

mattnさんと初めて会った際に書いた記事です。こうして筆者はBram氏とmattnさんに会ったことのあるおそらく世界で唯一の人間となったのです。

なお mattn さんとはその後、出張で東京へ来られたとき、第1回のbuildersconで講演されたとき、そしてVimConf 2017に来ていただいたときと、それなりに頻繁に顔を合わせるようになりました。

Road to VimConf 2018

VimConfは2013年から毎年秋に開催されています。筆者はその前身となったujihisa.vimというミートアップに2011年から参加していました。2011年は本書にも収録したVim昔語を執筆した年で、vim-jpという日本のVimの開発者とユーザーがともに集うコミュニティを立ち上げた年でもありました。その2011年からVimConfに名前を変えての2016年までは毎回喋らせてもらいました。なお各回の筆者のトークのタイトルは以下の通りです。

- 2011: Illustrate Vim core source code, dissing (訳: Vimのソースコードをディスリながら解説)
- 2012: vim-jpの活動報告 ～Vimの過去と現在と未来
- 2013: How to suggest new features for Vim (訳: Vimに新機能を提案するには)
- 2014: Identity of the Vim ～Vimの未来・役割・ユーザーの心構え
- 2015: Vimのgitへの移行について
- 2016: Vimの日本語ドキュメント

2015年までは毎回トップバッターとして一番元気な状態で喋らせてもらってました。しかし2016年はトップバッターをk-takataさんをお願いし、筆者は運営のサポートをする方向に舵を切りました。その直後の2016/11/06に書いた記事 <https://www.kaoriya.net/blog/2016/11/06/> を以下に引用します。

VimConf 2016 で演ってきた

VimConfはココ数年、毎年秋頃に開催されているVimの大規模なカンファレンスです。去年まではどちらかというとお客さんの立場でトップバッターで講演してきたのですが、今年は裏方である運営のさらにサポートという形で関わらせてもらいました。

(～中略～)

今回に限らずVimConfの参加で個人的に感じたのは、Vimは若い人に恵まれているなということでした。若さと情熱にあふれるだけでなく、高い技術力やハッキリとした目的意識、そしてお互いに協調しながら目的へと進していく実行力。これらを兼ね備えた若者がとても多いのです。Vimというソフトウェアを通じて、そういう人たちが集まってきているということは、実に稀有なことで感謝しかありません。賞味期限の過ぎたオッサンエンジニアである私は、彼らが存分に活躍できて正当な評価を受けられる土壌を整えるのが、今後の自身へのミッションかなと思いを新たにしました。

最後に。今回の VimConf 2016 では私が運営に参画することで、従来とは少し方法を変えています。これは今後のVimConfのステップアップを睨んだ予行演習の意味もありました。私の目には演習成果はコレ以上を望めないほど良好であり、大きなジャンプを果たせるとの確信を得ています。まだ次回開催については構想段階であり、詳しいことは何もお約束できないのですが、実現にあたってはより多くの方々に協力をお願いすることになると思います。その節には是非よろしく願いいたします。

こうして迎えた2017年のVimConfは大きく様変わりしました。アキバプラザを会場として借り、スポンサーを募り、ノベルティを用意し、海外からスピーカーを招待し、同時通訳を提供し、本格的な国際カンファレンスの体裁を整えたのです。筆者はスタッフの一人としてこの体裁を整えるのに注力しました。結果は大成功だったと言って良いでしょう。

VimConf 2017の成功を受け、VimConf 2018では発足からの悲願である「Bramを招待する」を実行に移し、結果は周知の通りです。執筆時点ではまだ開催されていませんが、よほどのことがない限りは、今年のVimConfはBramをはじめとして日本の主要なVim開発者が一堂に会する素晴らしい回になることでしょう。

ここまで豪華になってしまうと、同等以上のVimConfが今後も開催できるかはもはやわかりません。つまり今回限りの絶後の内容になる可能性も十分にあります。チケットは近日中に販売予定です。興味のある方はお見逃しのないように。

解説: Road to VimConf 2018

ここまで示したように筆者は足掛け3年にもわたる長大な計画をもって、VimConfをVimの作者であるBram氏を招待できるほどの国際カンファレンスへと育てました。何が筆者をそこまで駆り立てたのでしょうか。

筆者は世界でおそらく唯ひとりBram氏とmattnさんに会ったことがあり、そしてこれまでのVimConfに参加してくれた多くの人とも会いました。プラグインを作る人、それらのユーザー。そういう一つ一つの出会いに筆者はいつも未来への希望・明日を生きる糧・単純に喜びをもらってきました。言い換えれば筆者が日本では最も多くのVim開発者とユーザーに会ったことがあると言っても過言ではありません。その責務として彼ら同士が会って話す機会を設けなければ、という使命感を抱いているのです。そう厨二病のアレです。

この喜びをより多くのVimmerにも体験して欲しいのです。分かち合いたいのです。Bram氏に、mattnさんに、k-takataさんに、h_eastさんに会った。VimConfに参加した皆さんにはこの喜びを感じて欲しいのです。誰かに自慢しても良いでしょう。そして次に・未来に繋げて欲しい。VimConf 2018がみなさんにとってそういう場になることを願ってやみません。

あとがき

高まるVimConf熱になされて、このような文章をまとめてみました。
ここには書ききれない話もあるのですが、いったんこれまでといたしとう
ございます。それでは次はVimConf 2018でお会いいたしましょう。

2018/08/10 村岡太郎 (a.k.a. KoRoN and @kaoriya)

